

[原著論文]

## 大学生と幼児との交流活動に関する質的研究 ——交流のあり方をめぐって——

田甫綾野

### 要 約

本研究では、幼児と大学生との交流活動に焦点をあて、どのような交流が両者にとって有意義なものになるかについて、実際の交流活動の分析を行い明らかにした。その際の分析の視点として「身体的同調性（岩田：2008, 2010）」と「互惠性（間野：2010）」を用いた。

その結果、交流活動がその後の幼児の遊びにつながったり、大学生の学びとなったりする交流は、①幼児と大学生の同調性が高いこと②互惠的な関わりがあることが明らかとなった。しかしながら、この二点を満たした交流であっても必ずしも両者に有意義な交流となるとは限らず、さらに以下の二点、①幼児の興味関心に沿ったことを媒介として交流を図ること②大学生が幼児の興味関心を満たす能力をもっており、幼児のモデルとなる必要があることが明らかとなった。

キーワード：世代間交流、互惠的関わり、身体的同調性

### 1 はじめに

昨今、世代間交流の意義が注目され、様々な世代において交流活動が行われている。特に、現代の子どもたちは核家族化、少子化の中で、家庭や地域で様々な世代の人たちとかわる経験が少なくなり、学校教育の中で、世代間交流が教育活動として位置づけられている（小学校学習指導要領生活編、中学校学習指導要領技術・家庭編（家庭分野）、総合的な学習の時間等）。特に、幼児期は、人との関わりの幅を広げていく時期であるとともに、様々な世代から交流活動を求められる対象となる。しかしながら、幼児については交流の目的が明確でない場合が多く、交流活動が相手側の要求に答えるという形になることも多い。

例えば、中学校家庭科であれば「幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かかわり方を工夫できること」（中学校学習指導要領技術・家庭編）とあり、幼児の発達を理解することを基盤に〈幼児と触れ合う際に重要なことは何かを理解する〉など、生徒にとっての学習目標が明確である。また、小学校生活科であれば、「自分たちの生活や地域の出来事を

身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする」(小学校学習指導要領生活編)とあり、高齢者から昔の遊びや生活を聞いて遊ぶことや、幼児と楽しく遊ぶなど到達目標が明確である。

このような中で、中学生や高校生が乳幼児と交流をもつことでどのような学習効果があるかに焦点を当てた研究は数多くみられる(伊藤:2007, 鎌野・伊藤:2008, 砂上ら:2005, 石川・吉川:2012など)。しかしながら幼児の場合は「高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」(幼稚園教育要領, 第2章ねらい及び内容「人間関係」)「高齢者を始め地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ」(保育所保育指針, 第3章保育の内容1. (2)「人間関係」)など様々な人とかかわること自体が目的となるため、そこでの体験の目的が不明確になりがちである。そのため、幼児の世代間交流について、どのようなものがふさわしいか考察されている研究が少なく、その質についての明確な分析が見られない。

吉川(2007)は現在行われている多くの「触れ合い体験」, またこれらをめぐる先行研究では、活動の内容についてほとんど吟味されていないことを指摘している。矢萩(2007)は触れ合い体験学習を受け入れる保育園側にアンケート調査をし、幼児にとっての効果や意義について分析しているが、あくまでも保育者の心象評価にとどまっていると言わざるを得ない。一方、角間・草野(2008)は世代間交流の視点からスウェーデンにおける「klass morfar」の実践を紹介し(ボストロム:2004)、高齢者が幼稚園や学校に配属され、教師とは異なる立場で子どもとのかかわりを日常的にもつ交流で、高齢者も労働を得ることができ、子どもたちにとっても教師とは異なる彼らの存在により、クラスが落ち着いたり、いじめが減少したりという効果があったと報告している。このような世代間交流における互惠性(間野:2010)は交流をする上で重要な視点といえるだろう。

しかしながら、現在、行われている多くの交流活動はこの点を十分に考えて行われているとは言えない。例えば中学校家庭科における触れ合い体験では、中学生から幼児への一方的な働きかけが中心になることが多く、この場合は幼児の満足度が低く、その場限りの交流にとどまる傾向にある(田甫:2012)。一方、中学生と幼児との双方向的な関わりが見られる交流では、幼児がそこでの活動をその後の遊びに取り入れたり、中学生との交流を望んだりというその後に繋がる交流が可能になっている。このような、双方向的な交流では、中学生が幼児をリードし、幼児の憧れの対象もしくはモデルとなることから始まり、徐々に幼児もその活動に正統的に参加できるようになっていくというプロセスが見られた(田甫:2014)。

そこで、本研究では、大学生と幼児との交流活動について事例を分析し、幼児との双方向的な交流が具体的にどのような意味をもっているか考察する。このことを通して、幼児の異世代との交流活動において、双方に意義ある活動になるための要因について検証したい。

## 2 研究対象および研究方法

### 2.1 研究対象

観察期間：2015年3月～2015年12月

調査対象：①楽器を通じた交流（3月3日）

（Y大学附属幼稚園<sup>1</sup>）とY大学音楽教育専攻学生）

②陶芸ワークショップにおける交流（10月7日）

（Y大学美術教育・芸術運営・家政教育専攻の学生と近隣の幼児）

③クリスマス会における製作を通じた交流（12月16日）

（Y大学家政教育専攻学生と近隣の幼児・児童）

### 2.2 研究方法

デジタルビデオによる撮影および参与観察を行った。ビデオ撮影については、①については筆者のみで、②③については筆者と研究補助者の2名で行った。また②については固定カメラも用いて全体を撮影できるようにした。それぞれの交流活動について文字記録におこし、そこでの幼児と大学生の「かかわり」について分析した。

分析の視点として、先行研究より、幼児との交流活動において有効と考察された「身体的同調」（岩田：2008, 2010）、「共感」（佐伯：2007）を用いた。

## 3 幼児と大学生との交流

### 3.1 幼児の興味関心から生まれた交流事例（楽器を通しての交流）

#### (1) 交流のきっかけ及び概要

本交流は、Y大学附属幼稚園の3歳児クラスの幼児たちが楽器に興味をもっているという話を聞いたことから始まった。筆者がY大学附属幼稚園を訪れた際に楽器に興味をもって遊んでいる3歳児の様子を見て、また副園長から日頃の様子やこれまでにいくつかの楽器に実際に触れる経験をしていることをうかがった。

そこで、音楽教育専攻の学部学生に声をかけ、園児たちに楽器を見せてもらえないかお願いしたところ、快諾してくれ、他に学部生2名と大学院生1名を誘って、ミニコンサートを企画してくれた。当初は、3歳児の1クラスに楽器を見せに行く予定であったが、園全体でコンサートに参加するということとなった。

(2) 事例1 〈楽器への興味〉 2015年2月9日 3歳児 9:50～

登園してきて幼児たちは好きな遊びをしている。保育室では大学生と一緒に家づくりをする子と、T(担任保育者)と一緒に床に座って楽器の絵本をみている子たちがいる。

TとK男、A子が楽器の本を見ている。二人とも登園してきてまだ身支度を整えていないが、保育者はそれを促すことなく本を見ている。ドラム(?)を見てA子が「タヌキ！」と言ったことからTが「タヌキじゃなくて！」と人差し指を立ててA子に鼻に指を置く真似をしている。A子はそれがおもしろかった様子で、いろいろな楽器を演奏する人の写真を指差して「タヌキだ！」と言っている。その度にTとK男が「タヌキじゃなくて！」と言って同じ動作を繰り返している。A子が「オリガミ!」「すいとう!」などと同じように楽器を指差して言うと、TとK男はその度に「オリガミじゃなくて!」「すいとうじゃなくて!」と同じ拍子で繰り返している。B子もやってきて一緒に本を見ている。A子は水筒をロッカーに起きに行く。

Tがアコーディオンを指し、「園長先生がひいてくれた楽器だ」と言う。K男が「これ外国の人だよ」と言うとTが「園長先生じゃなくて!」と同じ拍子で繰り返す。するとB子がまた「タヌキだ!」と言って、TとK男が「タヌキじゃなくて!」と応じている。

A子が「タヌキ! タヌキ! タヌキ!」と言いながら戻ってくる。TはK男たちに何かの楽器の説明をしていると(聞き取れなかった)、B子がまた「〇〇だったらタヌキ!」と言って笑い転げている。TとK男は「タヌキじゃなくて!」を繰り返す。

A子が「お料理するのもあったよ!」と言うとTがページをめくり「そうそうこれフライパンだよ」とフライパンをぶら下げた楽器を指差す。A子は「これタヌキ? これタヌキ?」と繰り返して笑い転げる。TとK男も「違う違う。タヌキじゃなくて!」と繰り返して大笑いする。三角の楽器を指してA子が「サンドイッチ?」カホンを指して「えんぴつけずり?」などと言っている。その度にTとK男が「〇〇じゃなくて!」を繰り返している。

C子が「たいこ!」と言って指差すとK男が「C子ちゃんが正解しました!」と言う。

Tは「これもたいこだよ。『ドラム缶に色を塗ってそのままドラムにしたスチールパン』だって」と解説を読むと、A子が「パン、パン、パン! アムアム」とパンを食べる真似をしている。TとK男は「そのパンじゃなくて!」と繰り返している。B子が「パンって書いてあるじゃん」と言うとTは「これ食べれるの?」と言う。A子がまた「タヌキタヌキ!」と言うとTとK男が「タヌキじゃなくて!」と繰り返す。B子は「シチュー?」と言うとTとK男が手を横に振りながら「違う違う、シチューじゃなくて!」と言っている。

Tが「これもフライパンだよ」と言って楽器を見ている。A子が「タヌキタヌキ」と言うとTが「確かにタヌキのおなかみただね」と言っている。その後もしばらく楽器の絵本を見ていた。

**分析**

楽器の写真が載っている絵本を興味深そうにTと共に数名の幼児たちが見ていた。筆者は最初の場面は見えていなかったのだが、A子が「タヌキ!」と言ったことに対してTが「タヌキじゃなくて!」と節をつけて言ったことがおもしろかったようで、同じやり取りを何十回と繰り返していた。途中タヌキ



以外にも、「園長先生」「サンドイッチ」「鉛筆削り」などが出てきて、いろいろな珍しい楽器を他のものに見立てたりしながら、Tたちの「○○じゃなくて!」というリズムカルな節まわしとの応答を楽しんでいた。幼児たちもTも笑い転げており、そのやり取りを楽しんでいる様子うかがえた。

この場面の楽しさは、「タヌキ!」「タヌキじゃなくて!」という応答関係やことば遊びが中心となっていたが、楽器の写真をみるというところから逸脱することはなく、(例えば保育室内にあるモノや自分の持ち物などを見立てて遊ぶということにはならず)楽器に対する興味が根底にあるということが読み取れた。

**考察**

副園長に聞いたところ、K男が「ズーラシアンブラス」を見てきたことから、楽器や指揮への興味を示しており、それがクラスの幼児たちに派生して、クラス全体が楽器の興味をもっているということであった。K男は友達と遊ぶことが難しいところがあるが、楽器のことにになると、友達とつながって遊ぶことができるという。また、この事例には出てきていないがO男も友達と遊ぶことが難しい幼児であるが、段ボールでの楽器作りなどを楽しんでおり、保育者は楽器を通して幼児たちがつながって遊べるようになるのではないかと考えているとのことであった。

事例1からもリズムカルなことばの応答というところに楽しさの中心はシフトしていたが、楽器に興味をもって本を見る姿が継続しており、楽器への興味の高さがうかがえた。リズムカルなことばの応答の中では、幼児たちとTとの身体的同調がみられ、楽器を通して、その言葉遊びを楽しんでいることが分かった。このクラスが日常的な保育の中で、保育者や幼児たちの同調性が高いということがいえる。

(3) 事例2 〈ミニコンサート〉 交流の様子 2015年3月3日9:50~11:10

**コンサート前**

9:50 大学生4人が、ホールに楽器を出して準備をしていると、3歳児の①K男が自作の

譜面台をもってTと一緒にホールに来る。他にも数名の幼児が見に来ている。大学生が楽器を出して準備しているところを興味深い目で見ている。K男はTと楽器を少し見た後、保育室へ戻っていった。

9:55 3歳児クラスの幼児たちがTと一緒にホールにくる。一人の幼児が入り口で「もういいかい?」と聞き大学生が「もういいよ」と言うと、静かに手をつないで入ってくる。ホールはコンサート会場となっており、幼児たちが座るための積み木が用意されている。幼児たちはそこに静かに座る。②K男は指揮棒を、O男は段ボールで作ったチェロをもっている。

O男はバッハの無伴奏チェロ組曲1番が好きだということで、③副園長が「お姉さんにバッハを弾いてくださいって頼んでみる?」と聞くと「うん」とうなずき、副園長と一緒に、舞台袖にいる大学生のところへ行く。K男も後ろからついていく。O男は自作のチェロを弾く真似をしながら「バッハの…」と言っている。大学生たちは「無伴奏チェロじゃない?」と言うと、院生のI君がクラリネットですべての楽器を吹いてくれる。O男はジャンプして「わー」と言って喜んでいる。副園長が「これ? OK?」と言うと、O男は手をあげて「わー」と言う。副園長が「じゃあ、これもお願いできますか?」と言うと、大学生もそれに応じ、相談をしている。④O男は嬉しそうにチェロをもって自分の席に戻ってくる。

#### コンサート

10:30 すべてのクラスがそろってホールに座る。副園長が話をし、「今日はどうしてみんなが集まっているのか知ってる?」と聞き、5歳児のR子が「コンサートをしにきてくれる」と言う。副園長の紹介でコンサートがはじまる。O男とK男は真剣な眼差しで副園長を見ている。

副園長の促しで、「もういいかい〜」と幼児たちが聞き「もういいよ」と大学生が言うと、幼児たちから自然と拍手が起こる。学生H(2年)のみが登場しカホンをたたき始める。そのリズムに合わせて他の大学生も出てきて「さんぽ」の演奏が始まる。5歳児から自然と手拍子が起こり、歌の部分になるとみんなで歌いだす。①自作の指揮棒をもって座っているK男が立ち上がって、Tの顔を見て前に出ていこうとすると、Tが首を横に振って「まだ」と静かに伝える。4歳児、3歳児も手拍子をしながら歌い始める。②K男も口ずさんでいる。①O男は自分の段ボールのチェロを弾いて嬉しそうにしている。曲が終わって拍手が起こるとO男は嬉しそうに自分の弓を頭の上に掲げてグルグルと回す。

学生I(M1)が学生全員の紹介をし、次の曲と楽器(フルート)の説明をする。「はるがきた」を学生IとM(2年)が演奏し、HとW(4年)が歌っている。幼児たちは歌を知らないようで静かに聞いている。演奏が終わると拍手が起こる。

学生Iが「次の曲はなんだかわかる?」という幼児たちから「ゲラゲラポー」や「さく



らんぼー」などと声があがる。Iは「なんだろう」「さくらんぼって大塚愛の～？」などと聞いている。

学生Iが「妖怪体操第一です」と言うと「よっしゃー」と声があがる。演奏が始まると3歳児から5歳児まで歌いながら踊っている。終わると拍手が起こる。②O男はあまり興味をもっていない様子である。

学生Iがクラリネットを出し「次に紹介するのはこの楽器なんです。何ていう楽器か知ってる？」と聞くと「クラリネット!」「インターネット!」などと口ぐちに幼児たちが発言する。「正解を言う前に一曲聞いてください」と言うとピアノが鳴り、アナと雪の女王の「Let it go」が流れると「わー」と歓声があがる。③O男は耳をおさえTに抱きつく。TはO男を抱え部屋を出る。他の幼児たちは歌い始め特にさびの部分では大合唱。間奏分では手拍子となる。演奏が終わると拍手が起こる。

学生Iは「さあこの楽器はなんという楽器でしょう?」ともう一度聞くと「クラリネット!」「インターネット!」と声があがる。「インターネットじゃないよ」とIが言うと笑いが起きる。「クラリネット聞いたことある?」とIが聞くと「聞いたことある」という子「聞いたことない」と声があげる。Iが「聞いたことない人はここで覚えてください。クラリネット壊しちゃった」と言って演奏を始める。O男も戻ってくる。幼児たちは「クラリネット壊しちゃった」の歌は知らないようで、歌声は上がらないがほとんどの子が手拍子をしている。1番が終わるとIは楽器の下部分をひとつずつ外していき、出ない音や変な音がでる。外すたびに幼児たちから大歓声があがり、変な音が出ると大爆笑が起こって大喜びしている。演奏が終わると大歓声が起こる。

その後、ホルンによる「ぞうさん」を演奏する。③K男は立ち上がっている。ぞうさんが終わるとIが「今日は皆さんの中で僕たちと共演してくれる人がいます。指揮のK男さんとチェロのO男くんです」と言うと、④二人が前にでる。④K男は前に出ると深々とおじぎをする。一度自分の席に戻り、譜面台をもって再び前に出る。「演奏する曲はO男君のリクエストで、バッハの無伴奏チェロ組曲という曲です。」と言うと幼児たちから「知らない」と声があがる。「O君は物知りだから知ってたんだね～」とIが答えている。

⑤K男が再びおじぎをし、Iと目を合わせると指揮を始める。それに合わせてIが鍵盤ハーモニカで演奏し始める。⑤O男は少しチェロを弾く真似をするが、Iの方を見ている。⑥K男は飛び上がった腕を素早く回したりして指揮をしている。演奏が終わるとIが二人と握手をする。⑥O男は喜んで足をバタバタさせながら、弓を高く上げてクルクルと回す。⑦K男も笑顔で飛び上がっている。Iが「ちなみに急なリクエストだったのでお兄さんインターネットで楽譜を探して演奏しました」と言うと笑いが起こる。

次の曲はK男O男も一緒に演奏することをIが告げ、「みんなの大好きな曲です」と言う。アンパンマンのマーチがホルンとピアノで演奏される。幼児たちは「えー」と声があがる。

手拍子が起き、歌を歌っている子もいる。K男は指揮棒をもって幼児たちの座っている間を回り、舞台に戻る。舞台の幕に隠れたりしている。⑦O男はチェロを弾く真似をしたり大学生の方を見たりしている。

最後の曲は「となりのトトロ」であることをホルン担当のWが告げると「わー」と幼児たちから歓声が起きる。K男は自分の席に戻っているが、O男は前の椅子に座ってチェロを構えている。前奏から歌い始める幼児もいる。さびの部分になると「隣のトトロ〜」と大合唱になる。2回目のさびの部分で5歳の女児3名が肩を組んで歌い始めるとそれが伝播し、5歳児全員が肩を組んで左右に揺れ始める。5歳児の担任も笑顔でそれを見て自分も体を左右にふり、幼児たちの様子を写真に撮っている。

曲が終わると拍手が起こり。最後にIが楽器と学生の名前をもう一度紹介し、K男とO男のことも「チェロのO男お兄さん」と言うと⑧O男は笑顔になって弓を頭の上でクルクルと回す。「指揮のK男お兄さん」と言うと⑧K男は前に出てうれしそうにおじぎをする。保育者の促しで「ありがとうございました」と言って、部屋に戻る。

#### コンサート後

10:55 3歳児クラスの幼児たちだけ残って楽器を見せてもらっている。フルートとホルン、クラリネットは大学生が音を出してキーやバルブを幼児たちに押させてあげている。幼児たちは楽器の間近によって見ている。大学生はいろいろな音を出して聞かせたり、楽器の仕組みを説明したりしている。O男はチェロをもって、クラリネットを見ている。K男はクラリネットを触らせてもらっている。

女児がカホンを叩いて「おもしろい音」と言っている。大学生と握手をして出ていく幼児もいる。

#### 分析

##### コンサート前

コンサート前のK男とO男の様子を見ると、コンサートを楽しみにしていることが見てとれる。K男は自分で作った譜面台をあらかじめもってホールに来ており（下線部①）、みんなと一緒に来るときにK男は指揮棒をO男は段ボールで作ったチェロを持ってきている（下線部②）。本物の楽器を演奏するコンサートで、普通は幼児側が演奏に加わるということはないが（この時も事前に一緒に演奏する話はでていなかった）、K男とO男は本当の楽器の演奏をとっても楽しみにし、自分も一緒に演奏したいという気持ちが強かったことがうかがえる。



また、O男がバッハの無伴奏チェロ組曲が好きだということで、副園長と一緒に大学生に演



奏してほしいとお願いしようと促すとO男は意気揚々と舞台上に上がり、大学生に段ボールのチェロを弾きながら頼んでいる姿がみられ、普段は自分の思いを他者に伝えることが難しいO男が、自分の思いを伝えたいと強く思っていることが分かる（下線部③。）大学生も、突然、専門でもない楽器の曲を弾いてほしいと頼まれたにもかかわらず、みんなで何の曲か予想し、その場でスマートフォンを使って楽譜を探して、O男の要求にこたえようとしている姿がみられた。この時点で本当に演奏できるかは不確実であったが、O男は自分の思いを受け入れてもらったことがうれしかった様子で、にこにこしながら自席に戻ってきている姿がみられた（下線部④。）ここでの大学生たちは、O男の思いを共感的に受け止めているといえるだろう。

### コンサート

〈全体の幼児たちの様子〉

曲の演奏が始まると、自然と手拍子が起きたり、自分たちの知っている歌であると歌いだしたりする姿がどの曲でも見られた。また、曲がはじまったときに「わー」という歓声が起き、演奏が終わった際に儀礼的ではなく、自分たちの楽しい思いを表現するかのような拍手が起こっていた（波線部）。このことから、もともと楽器の興味をもっていた3歳児のみならず、全園児がコンサートを楽しんでいる様子が見えたと感じた。特に5歳児は知っている歌は大合唱し、知らない曲は静かに聞いている姿がみられた。特筆すべきは最後の曲である「となりのトトロ」である。みんなが好きな曲のようですぐに大合唱になっており、さらにさびの部分になると、数名の女児が肩を組み左右に体をゆすりながら歌い始めた。それがあつという間に5歳児クラス全体に伝播し、全員が肩を組んで体をゆすって曲を楽しんでおり、卒園を間近に控えた5歳児のクラスのこれまでの築き上げられたつながりと、幼児たちのつながりが表れていた（二重波線部）。この様子から、演奏者である大学生と聴衆である幼児たちの身体的同調性の高さのみならず、幼児同士の身体的同調性も高いということがいえる。

〈O男とK男の様子〉

K男（下線部）とO男（二重線部）は特に楽器に興味をもっている様子で、コンサート前からコンサートを楽しみにしている様子が見えたと感じたが、コンサートが始まってからもその思いを見ることができた。

K男はコンサートが始まってすぐに前に出ていこうとしたり（下線部①）、歌を口ずさんだり（下線部②）、興奮して立ち上がった（下線部③）とコンサート全体を楽しんでいる姿がみられた。また、大学生に呼ばれ、一緒に演奏する段になると、指揮者のようなふるまいを見せ、聴衆に向かっておじぎをしたり、大学生Iとアイコンタクトをとったりする姿がみられた（下線部④⑤）。指揮をする際も、素早く腕を回したり、飛び上がってみたりと本物の指揮者がするような動きを再現しようとしていた（下線部⑥）。また、みんなに拍手をもらったり、大学生から握手を求められたりすると喜びを体全体で表現していた（下線部⑦⑧）

一方、O男は、大きな音やほかの幼児たちの大合唱等が苦手な様子で、耳をふさいで不快感を表し、部屋から出ていく姿も見られた（二重線②③）。しかしながら、自分の心地よいと思

う曲では自席で自分もチェロを演奏する真似をしている姿がみられ、演奏が終わって拍手が起ると自分も弓を持った手を高くあげ、くるくると回して喜びの表現をみせていた（二重線部①）。このことから、自席にいる際も、O男は演奏者としてコンサートに参加していることが分かる。さらに共演する段になると、O男も自ら前に出てきてうれしそうな表情を見せる（二重線部④）。実際に演奏がはじまると、熱心に演奏するというよりも、大学生Iの演奏する姿を見ているが（二重線部⑤⑦）、演奏が終わり、Iが握手を求めてくるとそれに応じ足をバタバタとさせながら、手を高くあげて弓をクルクルと回して嬉しそうな表情を見せ、最後にIからもう一度紹介された際も同様の動きを見せた（二重線部⑥⑧）。

このように、K男もO男も大学生の演奏を聴くというよりも、一緒に演奏するという能動的なスタンスでコンサートに参加しているといえる。O男は身体的同調性は高くはないが、K男は音楽に合わせて体を動かしながら参加している様子が随所にみられた。

〈大学生の様子〉

大学生は大学院生のIを中心に、プログラムを作成し、当日の進行を行っていた。Iは作曲が専攻の学生であるが、マネージメント能力や、楽器の演奏（ピアノやクラリネット）、即興表現やジャズの演奏等の技術も高く、学生や教員の間でも多彩なところを評価をされている学生である。Iを中心に大学生の様子を分析すると、Iの幼児との応答性の高さが明らかとなった。

曲の紹介等では必ず幼児に問いかける形で幼児からの反応を引き出している。また個々の幼児の発言に対してもそれらを拾い投げ返している。選曲を見ても幼児が好きな曲を選んでいるということもあるが、幼児がただ音楽を聴くのではなく、能動的にかかわれるような選曲をしている。それは、幼児たちの反応からも明らかである。思わず歌いだしたり、踊り出してしまうような曲や（「さんぽ」「Let it go」「となりのトトロ」「アンパンマンのマーチ」）、思わず笑いだしてしまう曲（「クラリネット壊しちゃった」をクラリネットを解体しながら演奏する）などが散りばめられており、応答性が非常に高いプログラムとなっていた。

### コンサート後

コンサート中は、大学生との音楽を通してのやりとりや、歌ったり踊ったり、音楽を聴いたりすることを楽しんでいた3歳児も、コンサート後は興味をもっている楽器について知りたいという思いを出していた。それぞれの楽器を見せてもらったり、触らせてもらったり、実際に演奏させてもらったりして、楽しそうに大学生とかかわっている姿がみられた。楽器への興味関心を満たしている様子うかがえた。

### 考察

コンサート前のK男とO男の様子から、二人がコンサートを楽しみにしていること、そしてその演奏を自分たちも一緒に行うという気持ちでコンサートに臨んでいることが分かる。ここには、幼児と大学生が「演奏者—聴衆」という異なる役割ではなく、一緒に演奏するという「双方向的な関係」（間野2010）への期待が幼児たちにあることが分かる。大学生もそのことを感じ

取っており、O男のリクエストに応じ、一緒に演奏するということを実現すべく努力しようとする姿がみられる。この姿から大学生たちが幼児の楽器や音楽への興味を共感的にとらえていることが分かる。

もともと大学生の方も、自分たちが演奏者であり、幼児たちは聴衆であるというようなスタンスではコンサートの企画をしておらず、幼児たちが能動的にかかわることができるようなプログラム構成や、司会進行等を考えていたことが分かる。そのため、コンサート全体を通して非常に応答性が高く、幼児たちが静かに音楽を聴くというよりも、「自分たちも音楽に参加する」ということが自然と起こっているといえる。

特に楽器への思い入れが強かったK男とO男は、自ら演奏者としてふるまっている姿がみられるが、その状況を大学生側が作っている。例えばO男からバッハの無伴奏チェロ組曲の演奏を頼まれているが、それは一緒に演奏することを頼まれたわけではなく、彼らが演奏することを頼まれたに過ぎない。しかし、O男が自作のチェロを、K男が自作の譜面台と指揮棒をもって現れたことから、彼らを舞台上げて一緒に演奏することをプログラムの中に組み込んでいたのである。大学生側が間野(2010)のいう「双方性」を強く意識していたことがうかがえる。また大学生Iは作曲専攻で、即興表現やジャズ等も得意であるということで、演奏者と聴衆の「応答性」を演奏の中で意識していたのではないかと考えられる。

このように楽器をとおしての交流(ミニコンサート)において、大学生と幼児との「かかわり」は身体的同調性が高く、応答的な関係が高い交流となっていたといえる。さらには、幼児側の興味関心が高いということが合致していたため、両者に学びのある交流となっていたといえる。

#### (4) 事例3 〈楽器への興味の広がり〉 2015年3月11日

副園長から、「幼児たちがカホンを作って演奏しています」という写真入りのメールをいただき、早速幼稚園を訪問した。保育室には「おんがくたいみました またみたいです」という紙が貼られている。

10:00 T、O男、K子、B男が細長く切った白い紙に線を引き、黒いビニールテープを張って、鍵盤を作っている。O男も楽しそうに笑いながらTに「O男くん貼ってね」と言われ「うん」とうなずきながら、Tが切ったビニールテープを受け取り、K子にテープを渡す。Tは「O男くん貼ってよ～」と言って笑いながらO男にテープを渡すが、O男はK子に渡してしまうのを繰り返す。最後のいくつかはO男もテープを貼る。出来上がった鍵盤を床に置き、自分で書いた楽譜を前においてO男はピアノを弾く真似をしている。Tが「あそこにおいてやったら」と言うと、テーブルの上に紙の鍵盤を置く。Tが楽譜をもってきて置き、椅子ももってくる。O男はガムテープを探して保育室を少しうろろうしているが、「ガムテープあった!」と言ってピンクのガムテープをもってきてTとテーブルに貼る。「グ

ランドピアノ」と言いながら飛び上がるようにしながらピアノを弾く真似をする。

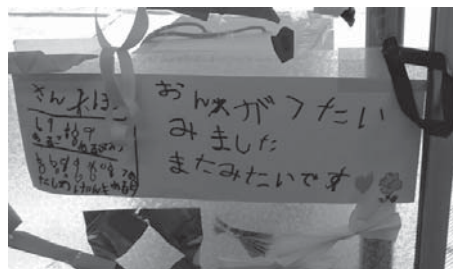
10:30 黒鍵の貼り方が違っていただけなのに気づいたのか (Tが言ったのかは不明), Tとテープを一度はがして貼りなおしている。椅子に座って「うーうー」と声をだしながらピアノを弾く真似をしたり, 立ち上がって弾いてみたりしている。鍵盤を貼りなおしている横でTは五線譜を白い紙に書いている。O男は黒鍵を貼りなおすのに夢中になっている。

10:45 Tに「おかたづけ?」と聞きTが「まだ大丈夫だよ」と言うと, 再びピアノを弾く真似をしたり, お店やさんごっこをしている幼児のところに行ったりしている。Tは「楽譜つなげる?」などと聞いているが, 反応はいまいちである。Tと男児二人がブロックで家づくりをしているところに行くと, ピアノを弾く真似をしたり, 鍵盤のところに戻って弾く真似をしたり繰り返している。グリッサンドの真似をする姿も見られ, 奏法にも思いがあるように見受けられる。しばらくすると, 椅子を持ってブロックコーナーに行き, 四角いブロックを膝に置く。O男にとっては鍵盤のイメージのようである。家づくりをしている男児がO男のブロックを「貸してね」と言ってとろうとすると, 手を横に振って嫌と言うことを示す。男児が「パヨリン?」と聞くとO男は「ぶーピアノでした」と言ってピアノを弾く真似をしている。ブロックの置き方を変えながらO男はピアノを弾くイメージで遊んでいる。粘土板を持ってきてブロックの下に挟もうとしたり, 上に置いたりしている(楽譜のイメージのようである)。K子が自作のカホンを持ってきて叩く真似をしている。

### 分析

コンサート当日は自作のチェロを持って, チェロへの思いを強く持っていたO男であるが, 1週間後に訪れてみると, ピアノを作ってピアノを弾く真似をして遊んでいる姿がみられた。40分以上にわたって, 鍵盤作りからピアノを弾く真似まで行っていた。コンサートの際は, 実際にチェロはなかったので, 生の演奏をみて, 新しい興味関心が生まれたということがいえるだろう。また, 楽譜づくりも行っていたようで, 五線譜にO男が絵を描いたものがピアノの前に置かれていた。ピアノを弾く真似をする際も, ただ手を上下に動かすだけでなく, 体をゆすったり立ったり座ったり, またコンサート当日, 大学生が鍵盤を手の裏でなでるように演奏する(グリッサンド)姿を見ていたのか, 同じような動きをする姿がみられた。

また, 保育室内には「おんがくたいみました ま



たみたいです」という手紙が貼ってあったり、段ボールでカホンがいくつも作られていたりコンサートでの経験が幼児の興味関心に影響を与えたことが分かる。女兒が段ボールのカホンに座って、段ボールを叩く姿も見る事ができた。

このように、コンサートでの交流が、幼児たちに新たな興味関心を生み、その後の保育の中でも生かされているといえる。これは、コンサートでの交流が一過性のものではなく、幼児の中に新たな経験として位置づいたということである。

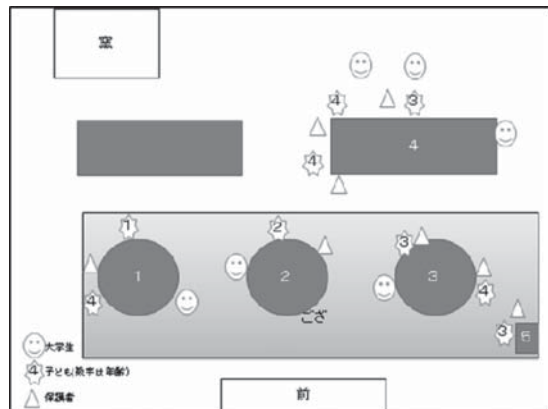
### 考察

ミニコンサートが単なるイベント的な交流ではなく、身体的同調性の高い、双方性の交流となったことは、先の考察で述べたが、そういった交流が幼児の経験として大きな影響を与えたことが明らかとなった。もともと関心の高かった「楽器」への興味がさらに深まり、また新たな楽器などを知ったことによって広がっていった様子が見てとれた。これは、ミニコンサートという交流の「かかわり」の質が影響していると考えられ、間野のいう「互恵性」(2010)のある交流となったことを示しているといえるだろう。

## 3.2 大学生の学びの視点から生まれた交流事例

### (1) 交流のきっかけ及び概要

Y大学子ども図書室の秋のイベントとして、美術教育の教員に協力してもらい、お話し会と陶芸のワークショップを計画した。大学生と一緒にワークショップに参加する機会を作り、中学校および高等学校家庭科の教科に関する科目「保育学(実習および家庭看護を含む)」受講学生に実際に幼児とかかわる活動を体験させ、幼児とかかわり方を実践的に学ぶ機会を設けた。



10月だったことからハロウィンイベントとし、テラコッタのランタンづくりとした。参加者は幼児と母親8組、大学生6人であり、このうち2名は美術および芸術にかかわる専攻の学生にも協力してもらった。大学生は事前に美術教育の大学教員のレクチャーを受け試作を作り、「教えるのではなく一緒に作って楽しむ」という、ワークショップの趣旨を伝えていた。活動内容はすでに練ってあるテラ





コッタ粘土を渡し、親子で好きな形のランタンを作った。出来上がったものは、乾燥後焼成し、後日引き取りにきてもらうこととした。

本活動を行った理由としては、3.1の結果から、身体的同調性が高く、双方性のある活動を設定したいと考え、「一緒に作る」製作的な活動を考えた。また、大学生がモデルとなって進められるような活動で一緒に来る保護者も楽しめる活動をと考えた。

## (2) 事例4 〈テラコッタのランタンづくり〉

【テーブル2】では2歳児K子と母親、大学生Aが3人で作業をしている。母親はランタンを作っており、子どもは大学生と薄く伸ばした粘土にウサギや花などの型で、型抜きをしている。大学生Aが粘土を延ばすと「どうぞ」と言う。K子が型を押して、形をつけると「あっクローバーだね」と声をかける。大学生Aが空いているところを指さすと、K子がそこに型を押す。大学生Aは「あっ」と驚きの表情をしてK子を見つめる。K子も大学生Aを見ている。また、大学生Aが粘土の空いているところを指さし、二人で型抜きを続ける。母親は黙々と作業を続けている。母親のランタンができあがりに近づいているのを見て大学生Aは「いいですね！ かぼちゃになりましたね！」と声をかける。母親は「長く使えるように…（何かつきたいというようなこと）」と話している。大学生Mは「すごい！ 10月で終わりになりますもんね。すごいすごい。何がいいですかね？ 何かクリスマスっぽい…」と言って型抜きを探している。

講師：「細かなパーツをくっつけるときは、傷をつけて水をつけてくっつけてください」と言って、作業を見て回っている。

筆者が型抜きを持ってきてK子に見せる。大学生Aが型抜きの中から探している。大学生Aが「K子ちゃんこれで型抜いてみて」と言う。K子が型を抜く。大学生Aが「ぎゅーぎゅー」と言いながらK子が型抜きをする。大学生Aは「上手上手、かわいくできたねーさちゃん」と言う。講師が粘土をもってきて「これを接着剤にして下さい」と言って渡す。K子は自分で型を抜いたウサギを机に並べている。K子は母親のところにあったLEDライトを持ってきて大学生Aに渡している。Aが「これを中に入れるの」と言って電気をつけて渡すと、K子が母親の作ったランタンの中にそれを入れる。母親は黙々と作業を続けている。K子がAに自分で型を抜いたウサギを見せるとAが「K子ちゃん上手〜」と言う。K子が母親の作ったランタンに自分で型を抜いたウサギをくっつけている。大学生Aが「わーすごい、すてきKちゃん」と言って喜んでいる。AはK子の型抜きしたウサギに傷をつけどべを塗り、「K子ちゃんこれもつけて〜」と言って渡すとK子が母親のランタンにつける。大学生Aが「すごい共同制作！」と言って喜んでいる。K子の型抜きしたウサギをAが貼るように促すとK子はどんどん貼っている。母親も喜んでいる。K子が「これ！」と言って粘土をこねると大学生Aは「K子ちゃんなんか作って」と言いながら、K

子が型を抜いたウサギを貼れるようにして母親に渡す。K子はうれしそうに粘土をこねている。Aは母親の出来をみながら「いいですね」と言っている。K子は再び型抜きを始める。抜いたものを母親のランタンに貼ってもらいたいようで、母親に渡している。大学生Aは周りを見渡している。小さい粘土を押して平たくしたり、丸めて団子にしたりしている。大学生AもK子と一緒にコロコロ粘土を丸めている。K子ができたものを見せると「すごいまんまるじゃん」と言いつつも一緒にコロコロと転がす。母親のランタンができあがった様子を見ると「いいですねーママ完成」と言いつつも、ひび割れ等がないかを一緒に確認し、修正し、板の上に完成したランタンをのせる。K子は「見て～」と言って、自分が型抜きして貼った部分を指さしている。K子が団子を作って「見て～」と言っているところに筆者が「コロコロも焼いたら」と声をかける。K子はぴよぴよはねながらうれしそうに「ころころ～」と言いながら団子を作っている。K子が「粘土楽しい」と言いながら粘土をコロコロし、母親の作ったランタンの横に自分の作った団子を置く。母親が団子に名前を書いている。

テーブル3では、2組の親子と大学生Kが作業をしている。M子と母親はそれぞれランタンを作っている。H子と母親は同じようなかぼちゃのランタンを二人で作っている。大学生KはM子のランタンを修正して渡している。Kは団子を作ってM子に渡す。H子の母親が「目が離れすぎちゃった」と言うときKは「あー」と言いながら見ている。Kは別のテーブルにある見本を見せている。両方の子どもに目を配りながら見て、必要なところで援助したり、声をかけたりしている。どべを持ってきて、パーツをつけるところをM子に教えてあげている。H子が「なにそれ～」と言うとき何か声をかける。H子もどべを手付けて、パーツを貼る。Kはパーツを一緒に貼ってあげている。Kは子どもたちが自分で作業できるようになると少し手持無沙汰な表情を見せるが、作業を見ながら丁寧に教えてあげている。M子がランタンの穴をあけた部分を粘土でふさごうとすると「そこに入れちゃうと」と言いながら直している。H子は母親と話しながら楽しそうに自分のランタンに付けるパーツを作ってどべを塗っている。H子は筆者にもうれしそうに話しかけ「かぼちゃきのこなの～」「おだんご食べれるの」などと言っている。大学生Kは場を離れる。子どもたちは母親と作業を続けている。H子は「おだんご三兄弟」と言いながら自分の作った団子を母親に渡す。母親はそれをセンス良くランタンの上に張り付けている。母親が何か言うと「やだおだんご三兄弟なの」と言う。H子はM子の母親に「何それ」と言うとM子の母親は「あし」と言い作業を続けている。H子の母親は黙々とH子のランタンを作っている。大学生Kは3分くらいして戻ってくる。立って様子を見て、となりのテーブルからどべを持ってくる。筆者が「こっちもとれそう」とM子のことを言うとKがどべを持ってくる。

M子たちの様子を見ているが、また場を離れ、テーブル4を見ている。母親同士は話をしながら最後の仕上げをしている。H子が手が白くなったというM子の母親が「一生懸命やったら手が白いんだよ。おばちゃんも見て～」と手を見せている。M子も「私が一番まっしろ」と言って手を見せている。大学生Kが戻ってきて、最後の仕上げの確認をし、板の上にのせる。H子は「やったーできたできた」と喜んでいる。

#### 分析

テーブル2では、K子と母親、大学生Aが製作をしていた。K子は2歳児でランタンづくりを自ら行うことは難しい年齢であった。母親も大学生Aも無理に形のあるものを作らせるのではなく、K子が楽しんで取り組めそうな型抜きをして遊んでいた。母親は自分の作品作りに没頭していたが、AがK子と共に、型抜きを行っていたので、K子は終始落ち着いて楽しそうに、型抜きを行っていた。

Aは下線部にあるように、K子がうまく型が抜けると「上手上手」などと褒め、K子が自分の型抜きしたウサギを母親の作品にくっつけようとする「わーすごいK子ちゃん、上手」と喜び、母親の作品にK子の型抜きしたものをくっつけるという作業が始まった。当初からその意識があったかどうか定かではないが、母親とK子が共に作品作りを楽しむことができていたといえる。

また波線部にあるように、型を抜く際は「ぎゅーぎゅー」などと声をかけたり、K子に作業を促したり提案したりするなど、K子が楽しく作業を行えるように促すかかわりが多くみられた。大学生Aは穏やかな性格もあり、優しい口調でK子に話しかけており、母親に対しても気さくに声をかけおしゃべりをしながらの作業を楽しんでいる様子であった。母親もK子に意見を求めたり、K子の意見を採用したりと作業が進んでいた。一緒に作品を作っていいことを伝えてあったにもかかわらず、A自身は作品を作っておらず、K子の型抜きを手伝うということが主なかかわりとなっていた。

一方、テーブル3における、大学生Kのかかわりは、破線部にみられるように、製作物の修正や必要なものの準備となっており、幼児たちと作る楽しさを共有したり、それを励ましたりという交流にはなっていなかった。しかしながら、H子もM子もそれぞれの母親も楽しそうに作業に取り組み、ランタンの完成を楽しんでおり、大学生Kの援助が有効ではあったといえるだろう。

#### 考察

テーブル2では、AはK子の作業に対して共感的に関わる姿がみられたが、身体的同調性はさほど高くなくK子の作業を見ていることが多かった。テーブル3ではKは子どもたちの手助けをする役割となっており、共感性、同調性共に乏しいといえる。

当初の予定では、大学生も一緒に作品を作りながら大学生がモデルとなりながら作品を完成

されるということであったが、幼児に対して課題が難しかったこともあり、大学生は手助けをするのみとなっていた。そのため、手持無沙汰になる大学生も見られ、当初の計画のように一緒に作ることを楽しんだり、大学生の作る姿を真似たりしながら作品を完成させるというようなかかわりはできなかった。

また、大学生も1回～2回試作を作って臨んではいたものの、十分に陶芸の知識や魅力を習得してはならず、子どもたちに伝えるところの難しさもあったと考えられる。この点が、3.1の音楽を通しての交流との違いであると考えられる。

#### 4 全体考察

以上の結果から以下のことが明らかとなった。

3.1の幼児の興味関心にそった交流では、幼児の興味関心を元に大学生との交流が企画実行されたことから、幼児の交流への意欲が高く、また交流後の遊びにも交流が影響を与えるという結果になった。また大学生にとっても自身の専門性と直結する交流であったことから、彼らの学びにもつながる交流となり、両者にとって意義ある活動であったことが明らかとなった。この交流の分析の結果、以下の2つの要素が重要であると考察することができた。

- ①幼児と大学生の身体的同調性が高いこと
- ②幼児と大学生とに双方向的な関わりがあること

これはどちらかからどちらかへ一方的に関わりをもつのではなく（例えば大学生が教えて幼児がそれを習得するとか、大学生が準備してきた遊びで幼児が遊ばせてもらうなど）、両者が共に主体的になり、相互に関わりをもつということである。その際に、身体的同調性（身体の動きやリズムがあう）をもつことが有効であると考察された。

これらの結果を踏まえ、3.2では、身体的同調性が高く、双方向的な関わりのある交流活動を設定し、実際の交流を試みた。ここでは、美術教育の教員にも協力を仰ぎ、陶芸のワークショップを行い、近隣に住む幼児を募っての交流活動を行なった。大学生と幼児が共に土をこね、作品を作るということは、身体的同調性も高く、双方向的な関わりがもたれると考えられたからである。

しかしながら、この二点を満たした交流であっても必ずしも両者に有意義な交流となるとは限らないことが明らかとなった。その要因として3.2の陶芸のワークショップでは、大学生が十分に陶芸のスキルをもっておらず、活動の見通しが立てられなかったことで大学生自身が十分に陶芸を行えなかったことがあげられる。さらには、ワークショップの性質上、母親が申し込みをしてきているため、興味関心が陶芸に向いていない幼児も見られた。

これらのことから、有意義な交流活動にはさらに以下の二点が重要になるということが考察された。

- ③幼児の興味関心に沿ったことを媒介として交流を図ること

④大学生が幼児の興味関心を満たす能力をもっており、幼児のモデルとなること

つまり、幼児、大学生共に活動に対して高いモチベーションをもっていることが重要であり、そのためには、交流前の準備や交流内容を吟味することが不可欠であると考えられる。

## 5 おわりに

本研究では、幼児と大学生との交流活動に焦点を当て、有意義な交流活動にするための要因を事例を分析することから①幼児と大学生の同調性が高いこと②双方向的な関わりがあることが明らかとなった。しかしながら、この二点を満たした交流であっても必ずしも両者に有意義な交流となるとは限らず、さらに以下の二点、③幼児の興味関心に沿ったことを媒介として交流を図ること④大学生が幼児の興味関心を満たす能力をもっており、幼児のモデルとなることが必要であることが明らかとなった。これは、筆者のこれまで行なってきた家庭科における幼児と中学生との交流活動とも共通している。

また、小学生と大学生との交流活動も実施した。小学校2年生の生活科の授業と大学生の生活科教育法の授業と連携し、小学生の作ったおもちゃで大学生が遊ぶという交流であった。ここでは、若年者である小学生が活動のモデルとなっており、多くの場合とは逆のパターンであったが、大学生側にも小学校生活科の授業内容を学ぶという興味関心(モチベーション)が高く、両者にとって有意義な活動となった。この活動でも、全体考察で述べた1~4が当てはまると言える。

この両者にとって有意義な交流活動を促す4つの視点は、幼児と大学生のみならず他の世代間交流にも当てはまると考えられる。今後、様々な幼児をめぐる交流活動についても検証していきたい。

### 謝辞

交流活動に参加して下さった幼稚園、小学校を始め、協力して下さいました皆様にお礼申し上げます。

### 付記

本研究は科学研究費助成事業若手研究(B) 課題番号:23730827および平成27年度山梨大学戦略・公募プロジェクトの補助を受けて行われたものです。

### 注

- 1) Y大学附属幼稚園は地方都市にある国立大学教育学部の附属幼稚園で、大学をはじめ、小学校、中学校と隣接の敷地にあり、大学生の授業、教育実習の受け入れやボランティア等の受け入れを行っている。園児数は90名弱で、3歳児2クラス、4歳児、5歳児1クラスずつ(担任各クラス1名、保育補助が1名配置されている)の園である。



## 引用文献

- 文部科学省『中学校学習指導要領技術・家庭編』教育図書, 2008
- 文部科学省『小学校学習指導要領生活編』日本文教出版, 2008
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008
- 矢萩恭子「次世代育成としての乳幼児とのふれあい体験～中学生・高校生の「保育体験学習」に関する実践の検討～」田園調布学園大学紀要 第2号, 2007, 125-153
- 伊藤葉子「中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」日本家政学会誌58(6), 2007, 315-326
- 鎌野育代, 伊藤葉子「中学校家庭科における幼児の触れ合い体験の教育的効果をどのように高めていくのか:アクションリサーチによる検討」千葉大学教育学部研究紀要 第56巻, 2008, 201-208
- 砂上史子, 日景弥生, 中嶋明子, 盛玲子「高校家庭科における保育体験学習の意識変容」(第2報), 日本家庭科教育学会誌48(1), 2005, 10-21
- 石川敦子, 吉川はる奈「中学校「技術・家庭科」の乳幼児ふれあい体験学習における効果と課題」埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 (11), 2012, 153-160
- 吉川はる奈「中学生と大学生を対象とした保育学習における実践的研究」埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 No. 6, 2007, 171-179
- 角間陽子, 草野篤子「中・高齢者の学校における世代間交流」福島大学地域創造20(1), 2008
- A. K. ポストロム「スウェーデン・ストックホルムの義務教育における『おじいちゃんプロジェクト』」『現代のエスプリ』444号, 至文堂, 2004
- 田甫綾野「中学校家庭科における幼児との触れ合い体験学習について:「かかわり」のあり方をめぐって」山梨大学教育人間科学部紀要13(20), 2012, 149-158
- 田甫綾野「「触れ合い体験」学習における中学生と幼児の「かかわりの質」について:保育者のインタビューを通して」山梨大学教育人間科学部紀要16(23), 2014, 149-156
- 佐伯胖『共感』ミネルヴァ書房, 2007
- 岩田遵子『現代社会における「子ども文化」成立の可能性』風間書房, 2007
- 岩田遵子「現代における乳幼児の生活の危機に大人はどう対処すべきか」日本教育方法学会編『子どもの生活現実にとりくむ教育方法』図書文化, 2010
- 間野百子「世代間の相互学習・相互支援の視点から」草野篤子編『世代間交流学の創造』あけび書房, 2010

# Intergenerational Interaction between University Students and Children

Ayano TAMPO

## Abstract

This is the research of intergenerational interaction between university students and children. Intergenerational interaction makes human relationships which is one of the most important educational goal for early children. But it is not specific aims just only becoming familiar with various people.

This research discuss reciprocity interaction is on condition that synchronism, interactive relationship, moreover interesting for children and students can satisfy children's needs.

**Keywords:** intergenerational interaction, interactive relationship, synchronism